

昭和天皇に単独拝謁を賜った陸軍中尉

陸士54家族会員

奥本 康大

「上聞(じようぶん)に達する」とは、現代人には聞き慣れない言葉であるが、大東亜戦争中の新聞紙上では、度々、目にすることができた。

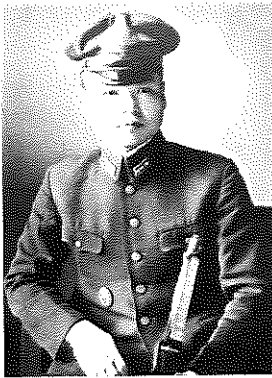


はなかつた筈である。天皇陛下に氏名まで伝えられるのは、金鷄勲章クラスの武勲をあげた将官クラスに限られたと思われる。

大東亜戦争緒戦、陸軍落下傘部隊は、昭和17年2月14日に蘭領東インドのパレンバン地区に奇襲攻撃をかけた。その結果、たった一日でパレンバン飛行場と2カ所の製油所(スタンダード、ロイヤルダッチシエル)を制圧するといった離れ業を成し遂げた。

記録によると、陸軍落下傘部隊約340名は、白昼堂々とパレンバン地区を守備するオランダ軍および連合国軍の約1200名に対し、果敢に戦いを挑んだ。約3〜4倍の敵の陣地のど真ん中に、落下傘で降下するのだから「決意」と「勇氣」は並大抵では無かつた筈である。

父はこの作戦に陸軍中尉(小隊長)として参戦した。落下傘部隊はドイツ、



奥本實 (大尉当時)

ソ連、アメリカがヨーロッパ戦線で使用したが、損耗率(5〜6割が戦死)が高く、以降投入されなくなっていた。昭和天皇は、戦後、「大東亜戦争は、石油で始まり、石油で終わった」とこ述懐されたが、「石油」に日本の命運を託されたことは容易に想像できる。

昭和天皇の「開戦の詔勅」にもあるように、当時はブロック経済であり、日本は「石油」を絶たれたら経済は立ちどころに衰退し、失業者が約1千万人から1200万人出ると予測されていた。「石油禁輸」により、日本は「自存と自衛」の為、断腸の思いで開戦に踏み切ったが、もし開戦に踏み切らなかつたらどうなつたかである。

江戸時代、鎖国から開国に舵を切り、急速に近代化に成功した日本の台頭が面白くないアメリカは、日本潰しのチャンスを狙っていたのだ。

大正13年、アメリカの「排日移民法」の施行、昭和15年「日米通商航海条約」の一方的破棄、及び「屑鉄」の禁輸断行、昭和16年7月「在米資産」の一方的凍結、昭和16年8月「石油の完全禁輸」こんな状況ではどんな小国でも戦争に踏み切つてもおかしくはない。

欧米列強に分割統治され植民地になるか? 戦争か? の判断しなかつたのである。

ほどのものであつた。満洲や樺太で石油の採掘を試みたが、日本の消費を賄いきれるものではなかつた。石油の輸入依存率は現在と同じく約9割を超えていた。また、大東亜戦争直前の日本の石油備蓄量は770万トンで年間石油消費量500万トンの1・5倍程度しかなく、戦争に突入すれば、1年程度で底をつくことが判っていた。

その為、日本軍は資源の宝庫である蘭領東インドに焦点をあて、密かにパレンバンに商社マンを装つた軍人を派遣して調べさせていた(近藤傳八陸軍大佐が派遣された)。

当時、パレンバンは世界でも屈指の石油基地であり、年間300万トンの石油を生産していた。日本はこのパレンバン地区を制圧することに全力をあげたのは言うまでもない。

敵に時間を与えることは、製油所などが石油設備を破壊してしまふ恐れがある為、落下傘部隊による奇襲攻撃が計画されたのである。

そのパレンバンの戦闘で父(奥本中尉)は驚異的な働きをした。偶然掌握できた部下4名と、2回の遭遇戦で敵に壊滅的被害を与え敗走せしめたのである。

一度目は百数十人の敵兵が飛行場方面から列車を組んで来たのを、拳銃と手榴弾だけで戦つたのである。

大辞林によると「天皇・君主の耳に入ること。また天皇・君主に伝えること」とある。戦いにおいて大きな殊勲をあげた軍人を、侍従武官などが天皇陛下にご報告したことを示す言葉である。

通常は戦果の報告であり、余程のこととなければ、戦場で功績があつた尉官クラス程度の名前を報告されること

戦闘は20分くらいで決着がついたところに、今度は市街地方面から飛行場に向かう援軍と遭遇、この敵部隊も前回と同数くらい車列であったが、怯むことなく対峙して戦い、これまた敗走せしめたのである。

残念ながら2度目は敵の士気も高く苦戦を強いられ、菊池曹長と対馬上等兵の2名が戦死、父は脹脛に貫通銃創を負い、川原軍曹も肩を射抜かれた。無傷なのは形野上等兵のみであった。

辛いなことは、敵はたった5名が百名以上の部隊に向かってきたとは考えられず、多勢の日本兵との戦闘継続は不利と判断、恐れをなして退却したのである。

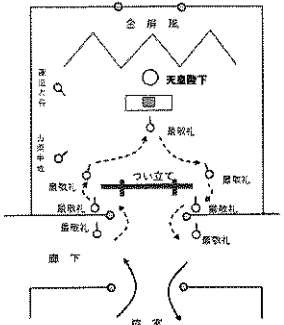
まさに天が味方したような遭遇戦であったが、パレンバン市街地と飛行場を結ぶ唯一の道路が、この遭遇戦で封鎖されたことは、まさに幸運であった。飛行場には援軍が来ることもなく、逐次、集結できた落下傘部隊の将兵によって最後の攻撃を仕掛け、午後9時に完全制圧することができた。

白昼堂々、少数の落下傘部隊が降下し、僅か10時間以内で南方の要衝パレンバン飛行場を制圧した。歴史的にも例をみない大勝利であった。

こんなパレンバンの大戦果を一番喜ばれたのは、昭和天皇であり、父の殊勲に対して異例中の異例とも思える陸

軍中尉(当時22歳)に対しての拝謁を賜われたのだ。

単独拝謁時の作法



この一部始終を記した父の手記が見つかり、このほど小冊子として纏めた。

前代未聞の中尉の単独拝謁のご下命に対し、落下傘部隊(挺進団)の上官たちは、慌てふためいた。挺進団長はじめ上官達が、経験のないことに、あれこれ迷いながら指示をされている様子も書かれており、些か滑稽でもある。

大東亜戦争中での出来事であるが、仄々とした場面もある父の遺稿を是非お読み頂きたい。

追記…父の手記にもあるが、宮中(御学問所)での拝謁後、恩賜の菓子(戴いたとあるが、父は、東京から宮崎の基地に戻る途中、奈良の片田舎に凱旋帰郷している。その時の記述も面白い。帰郷時に学校や村役場に挨拶回りをし

て、恩賜の菓子の一部をお裾分けしたのだが、村ではその菓子を材料の一部として混ぜ合わせ、大量の菓子を作っ

て村民に分け与えたのである。武勲をあげた英雄に、少しでもあやかりたい村民の思いが伝わってくる。今は失われてしまったが、当時の日本人が持っていた人との繋がりを大切にしている風習・文化を垣間見た気がする。

編集委…小冊子をご希望される方は、500円分の切手を同封し、封書で筆者(奥本康大様)までご連絡下さい。

〒299-0127

千葉県市原市桜台3丁目25番地39